



- 視点 交差する2つのエネルギー
- 特集 インテグレーターの役割が問われるとき
問屋オリジナルブランドの展開
- 建物とエクステリアの一体提案

今回のポイント

エクステリア業界による「まちおこし」提案のヒント

緑で点と点を繋げていくことで、まちなみの景観は大きく変わる。そしてそれは、住宅街なら住宅街、商店街なら商店街といった地域それぞれで、独特のやり方が可能だ。

ここ浅草であれば、歴史と伝統のある「花柳界」というブランドを活かすことで、緑を繋げていくことに新しい付加価値を与えることが出来る。

緑を辿って歩いて行くことは、そのまちの歴史を辿り歩くことであり、その場所の歴史と文化を知ることである。

日本全国のまち中、商店街には、それぞれの歴史や文化がぎっしりとあるはずだ。それを探っていき、緑を植えると同時に、次は素敵なエクステリアの提案などもしながら、まちおこしをするようなビジネスが面白いのではないか。



柳通りに面してある「お休み処」。この辺りには俳句を投函できる場所があり、訪れた人はここに座って一句詠み、投函する。するとその句のうち優秀作品は表彰され、さらに年間の大賞に選ばされると芸者さんの踊りと演奏で祝福の披露が行われるという。

工場直売のお米やお餅、あられなどの老舗の丸千本店。緑とパーゴラで店先に人を誘うような表情が生まれる



この場所は、まちの象徴である「見番」。「見番」とは、料亭、置屋、芸妓の連絡事務所、踊りの会や稽古場として利用する場所であり、花柳界の象徴的な場所。今回の浅草の緑化は、こうした準公共的な、地域を象徴する場所から始まった。柳通りとのバランスで風情のある空間に仕上がっている。

このパーゴラの下は可動式になっており、三味線の披露や芸者が躍る舞台になるという。ちなみに浅草には50名の芸者衆が活躍しているという。

した甲斐氏（午前中のガイドは正木氏）は「見てもらいたいののは、花柳界というソフトの部分と、緑を繋げる環境づくりが融合して、商店街の成功に導いたということですね。ちょっとした工夫をするだけで、お店は変わって行くんだな、というところを発見するのがポイントです」と見学前に見どころをレクチャー。



正木氏が手掛けた幅22cmの坪庭。緑化されるまでは無機質な看板だけの店だった。しかし狭い場所でも緑を使えば、このように心地よい空間になる。「緑を使えば人がそこへ誘導されるという象徴事例」（甲斐氏）である

商店街を活性化する「緑化」の力！



ガイドブック片手に花柳界を歩く！

公益財団法人東京都公園協会は第29回全国都市緑化フェアTOKYOの開催に合わせて「まちなか緑化モデル地区ガイドツアー」を開催。これは「まちなかグリーンマジック」と題し、日比谷公園会場とともに緑のまちづくりを進める5つのモデル地区が会場となって実施された。

モデル地区ガイドツアーは、まちなか緑化のプログラム作りから事業の推進までを担ってきた専門家である甲斐徹郎氏（㈱チームネット代表）と正木寛氏（エービーデザイン㈱代表）がガイド役となった。ツアーは浅草、木場、中野、久我山、池袋にて行われた。

本誌では、10月6日の浅草ツアー取材。江戸一番の花柳界を緑で繋げていく様子を歩いて体験した。また当日は「野点・江戸遊び体験」も同時開催されており、浅草の歴史と伝統にも触れることができ、まちの活性化のヒントも得られたイベントであった。



「ちょっとした工夫で店は変わる」と解説する甲斐氏。お休み処茶房「花の辻」にて



手作り巾着袋など浅草小物が手に入る谷輪商店の緑化

ガイドツアーはお休み処茶房「花の辻」からスタート。「丸千本店」、手作りの巾着など浅草小物がある「谷輪商店」、花柳界のセンター的な場所である「見番」へと移動。さらに、幅22センチの坪庭がある「辻むら」、「お休み処」、「浅草中村屋」、「雷5656会館」など、多数の緑化された店舗を見学した。

当日、午後のガイドとして随行

「緑でつながるまちなかを歩く」 「まちなか緑化モデル地区ガイドツアー」